



テッポウエビの仲間

泡瀬干潟を散策していると、石（琉球石灰岩）がゴロゴロしている場所や、一面が砂の環境など、いろいろな環境が見られる。干潟の上で見られる石は、その多くが昔はサンゴであった。

私たちが住んでいる陸の環境には、表面に無数の穴が開いている石（琉球石灰岩）が至る場所に見られ、山の上の方にもそのような石（岩盤）が見られる場合がある。そこは、大昔にはサンゴがすむ温かい海の中であったことを示している。つまり、干潟を散策していて観察できる石やゴツゴツとした岩盤（がんばん）は、ほとんどが「サンゴの化石」である。

この干潟の上にある石を静かにどかすと、いろいろな生き物が石の下で生活している。写真の生き物も、そのような石の下などで観察できる生き物の一つ「テッポウエビの仲間」である。

テッポウエビの仲間のオスのハサミ脚は、とても大きいのが特徴である。この大きいハサミで、「パチンパチン」と大きな音を出す。今では、分かる方も少ないと思うが（30～40歳代以降なら分かるかも？）、かの有名な芸人（ポール**）の一芸「指パチン」のように、大変クリアな音を出す。この大きな音は、威嚇（いかく）やエサをとるのに使うと考えられている。

テッポウエビの仲間は、干潟の砂の中や石の下などに、穴をほってすんでいる。他の生き物（ウニやサンゴ、ウミシダ、ハゼなどの魚）と共生（きょうせい）している種類も知られている。